



■平成30年度フレンドシップin九州派遣
●2年4組與那覇彩夏



私は、この研修に参加するにあたって個人的に目標にしていた事があります。それは、「今しかできない体験を精一杯楽しむこと」です。自分から話しかけたり、レクに進んで参加したりといつもなら出来ないことも今回の研修を機に出来るようになりました。参加する前の私より大きく成長することが出来たと胸を張って言えます。これからも、今回の体験を生かして多くのことに挑戦し成長し続けていきたいです。そして、こんな貴重な体験はめったに出来ません。学年問わず応募することができるので皆さん是非チャレンジしてみてください。

■『Ryukyufrogs』米国シリコンバレー研修参加

『Ryukyufrogs』は、世界と沖縄をつなぐ若手インベーターの発掘・育成をねらいとし、米国シリコンバレー派遣、課題解決プログラムの開発・発表を内容とした事業です。今年も、77名の応募者から最終6名の中に1年上運天愛球さんが選ばれました。

以下は、8月19日から10日間シリコンバレーで研修を受けての報告です。

●1年7組上運天愛球



「自分にしかできないことをする。」これが私のシリコンバレー研修での目標でした。結果から言うと、この目標を達成したという認識は全くありませんでした。その代わりに、自分と同世代の人や、周りの人たちとの差を身にしみて感じ、沢山の刺激を受けました。12月に行われるサービス発表では、協力して下さった沢山の方達の期待を胸に、身の回りの方に寄り添えるサービスを発表したいと思っています。

最後に、シリコンバレー研修で印象に残った起業家の話をしたいと思います。「好きな事やってる奴には絶対に勝てない。我慢してやりたくない事をやっていたら満足できないし、happyじゃない。」とても当たり前のことのように聞こえますが、現地で輝いている方々を見てみると、今まで軽く考えていた「好きなことで生きて行く」と言うことの素晴らしさに気づきました。自分自身としっかり向き合い、やりたい事をやる、追求して行く事を忘れずに前進していきたいです。

■進路講演会 9月3日

今年も麻生専門学校、徳久晶子先生に、1、2年生は「進路を考える」、3年生には「進学面接のポイント」を演題に講演をして頂きました。「当たり前は当たり前でできないとダメ」「高校は社会に出るための訓練の場」「一流の仕事をする人は体調を崩さない。健康管理が大切」「イチロウは自由時間も野球の練習を続けた。勉強は授業を集中して攻撃的に臨み、成績もトップクラスを維持した」などなど、沢山の素晴らしいことを教えて頂きました。きっと、皆さんの心に響いたことなのでしょう。夢の実現を！！

題名：『逝きし世の面影』
著者：渡辺京二



数学者の藤原正彦先生は、「1に国語、2に国語、3、4がなく、5に算数」という。また、同じ数学者で人工知能研究者の新井紀子先生は、「1に読解、2に読解、3、4が遊びで、5に算数」という。「遊び」は「手先や身体を動かす、モノに頼らない遊び」とのこと。とにかく、読解力を身に付けることの大切さを強調している。どの教科でも教科書に書いてあることを読んで理解できないことには勉強にならない。読解力は勉強をするための十分条件ではないかもしれないが必要条件で基礎である。読解力を身に付けるためにはやはり本を丁寧に、沢山読むことであろう。もちろん、読書は読解力を身に付けるためだけのものではない。読書は「知識・感情・意志」に働きかけるから、より心豊かな人生を送るためにも大切なのである。藤原先生は大学でユニークな読書ゼミを開講していた。受講条件が面白い。先ず、毎週一冊の文庫を読む根性があること、毎週一冊の文庫を買う財力があること、そしてレポートを提出し、ディスカッションすることなのだ。藤原先生と学生とのゼミでのディスカッションが録音され文字起こしされて1冊の本になった。題名は『名著講義』。本書『逝きし世の面影』はその『名著講義』で取り上げられた1冊である。

米国の国際政治学者サミュエル・ハンティントンが著書『文明の衝突』で、世界の文明を西欧文明、アフリカ文明、中華文明など8つに分けた。日本文明もその1つとしているが、一国で一文明は日本だけである。それだけ日本はユニークな文明の国なのであろう。その日本に幕末から明治にかけて沢山の外国人がやってきた。そして彼らは、当時の日本人や日本の様子を日記や手紙、滞在記などで残している。本書は、それらの膨大な史料を読み解き事実の検証を重ねるなどして、その頃の日本人や日本の姿を映し出している。外国人の証言を用いたことについては「私たちの祖先があまりにも当然のこととして記述しなかったこと、いや記述以前に自覚すらしなかった自国の文明の特質が、文化人類学の定石通り、異邦人によって記録されている」とある。その証言を幾つかひろくと、「地上で天国あるいは極楽にもっとも近づいている国だ(英国アーノルド)」、「人びとは幸福で満足そう(米国ペリー)」、「地球上最も礼儀正しい民俗(仏国ボーヴォワール)」などがある。イザベル・バード(英国紀行作家)も明治11年の日本を旅しているが、ある日、旅を終え宿で馬の革帯がないのに気づく。「もう暗くなっているのに、その男はそれを探しに一里も引き返し、私が何銭か与えようとしたのを、目的地まですべての物をきちんと届けるのが自分の責任だと言って拒んだ」ことなど、「民衆の無償の親切に出遭って感動」している。古き良き時代の日本の姿であるが、しかしそれも明治末期頃までには近代化の波にのまれて「ひとつの文明」は滅亡したとし、それを教えてくれたのも「実は異邦人観察者の著述である」とある。本書の解説の最後には「その過去は私たちの心性の中で死に絶えてはいない。かすかに囁き続けるものがあるからこそ、逝きし日の面影は懐かしいのである」と。「降る雪や明治は遠くなり」にけり(中村草田男)。来年4月には「平成」も終わる。